

「山本さんのこと」

高松市立栗林小学校 5年 松岡 理沙さん

山本さんが先週亡くなりました。

山本さんは私の陶芸の師匠でした。山本さんはハンセン病療養所のある大島で十九さいからずっと生活していました。

三年前の「大島あおぞら市」というイベントで初めて会いました。その時、山本さんの作った陶芸の作品を売るお手伝いをさせてもらいました。山本さんが作ったさまざまなすばらしい作品を見て、いいなあ私も同じように作りたいと思い、その場でお願いして弟子にしてもらいました。

それから何十回も大島に行きました。でもなかなか思うような作品を作れず、分厚くてすごく重い文ちゃんのようなものばかり。亡くなる四日前に行った時も自分用のお茶わんを作ろうと、ろくろを回して作ったものの分厚いものしかできず、見かねた山本さんがろくろを回して作ってくれました。これ位の大きさにええんか、大きいなあ、理沙ちゃんは、いっぱい食べるんやなあ、見えにくくなった目をこらし、曲がった指で、ろくろを自由にあやつり、りっぱな茶わんを作ってくれました。これで乾燥してかまで焼いて次に来る時は色ぬりやなあと話して別れました。

おそう式で、山本さんには別の名前があることを知りました。なぜ名前を変えないといけなかったのか、私には想像できないことがあったはずです。自分の名前を変えられ見も知らぬ島で差別され生きていくこと、それも家族や友だちとはなされて。どういう気持ちだったのでしょうか。

私が旅行先からはがきを送ると、

「理沙ちゃんは、いろいろな体験ができていいなあ。」

変な作品を作っても、

「おもしろいなあ。感性豊かや。」

進級した時には、

「いろいろ楽しい未来があるなあ。そのためにも勉強がんばれ。」

いつもいつも山本さんは私を勇気づけ、はげましてくれました。また何十通も送ってくれたはがきや手紙で私のことを応えんしてくれました。つらいことは何も言わず、人をうらむこともうらやむことも決して言わず、いつも前を向いてみんなを差別することなく、受け入れてくれました。

そんな山本さんと一緒に陶芸をしたり、手紙を交かんできたことが私には一番の自まんです。

天国にいった山本さん、今は自分の思うままにいろいろなところに行き、自由にいろいろなことをしていたらいいなあ。私もがんばるので見守っていてください。

今までありがとうございました。